

秋田屋本店が 企業養蜂事業

企業養蜂を導入した企業に提供する養蜂器具
＝岐阜市加納城南通、秋田屋本店城南事業所

屋上や所有地でのミツバチ飼育提案

養蜂・食品製造の秋田屋本店（岐阜市加納富士町、中村源次郎社長）は3月から、企業向けに養蜂器具や養蜂の研修プログラムをセット販売するサービス「企業養蜂」事業に乗り出す。研修を受けた企業の従業員が、自社の施設や土地でミツバチを飼育する。ミツバチが担う花粉交配によって飼育場所の半径2、3キロ程度の植物の育成が期待できるという。植物の光合成による二酸化炭素の削減と酸素の生成が同時に進む「積極的なSDGs」としてPRする。

（山本貴史）

SDGsやカーボンニュートラルに取り組む全国の企業に提案し、初年度で50社への導入を目指す。ビルの屋上、工場や施設などの屋外スペース、会社が所有する土地で飼育できる。

種蜂、養蜂器具、研修プログラムをスタートパックとして販売する。養蜂器具は、巣箱、巣からハチミツを抽出するのに使う遠心分離器、養蜂着など44点。研修プログラムは山県市内の秋田屋本店の養蜂場で年2回開催し、春に2泊3日で養蜂作業の基本やミツバチの増殖方法を学ぶ。秋は1泊2日で越冬期にミツバチの群れを維持する方法を身に付ける。1社につき2人が

器具や研修プログラム 販売

プログラムを受ける。また、都道府県知事に提出する必要がある飼育届の提出もサポートする。販売価格は1セット税込み118万円。

企業養蜂を行うことによって環境問題、気候変動への対策になるほか、企業イメージの向上、採取できた場合のハチミツの活用も見込まれる。同社によると、養蜂を行う国内外の大手企業が増えているほか、国内の都市部でも「都市養蜂」という取り組みが進んでいるという。中村社長は「ミツバチは植物を生育させる緑の源。二酸化炭素を多く排出してきた企業などに飼育してもらいたい」と話す。

